

五月、兄が帰還、私は恩師のお蔭で田舎の学校勤務、妻は菓子工場に就職、二人の子供は毎夕私達の帰りを外のガラス戸の前で待っていた。どんなに雪の降る時でも着たきり雀の着物で足中をはいたまま。私達の涙は洒れなかったが、そのうち長男が食事を受けつげなくなつた。「食べなくては」と言つても「いらん」と言うのみだったが、数日後、兄嫁に言われて驚き病院に行つて栄養失調と知つた。あと一日おそかつたら枯木のように死ぬところだつたと言われ、あわてて米の飯よ牛肉だ牛乳だ卵だバナナだとさがし回つた。会社の同僚が米や卵をくれた。医師も結局無料で注射を続けてくれたわけで渡る世間に鬼はいないと感謝にあけくれた。

数か月後、兄が私に「部屋代を払え」と言つたが、兄弟だからと思つて無視した。兄は凶太い奴と思つたのか、「出て行け」と追い出しにかかつた。私は養蚕場を借りて引越した。そして幾年か流れ、私は校長職を任命された。その時ばかりは兄も喜んだが、兄も大型店時代の流れにとり残され、人がやわらいでいた。

私も人生とは苦闘を笑つて受けとめねばと思つようになつた。

・敗戦の痕痛痛し丸裸の引揚者なれど同情はうけず引揚者の悲しみは消えないが、星の流れと共に明るく生きたい。

さらば基隆

福岡県 松尾 恵美

船は、岸壁を離れた。白いしぶきを思うぞんぶんはねちらしながら、進んでいく。

サラバ基隆^{キムン}、生まれて育つてきた基隆、私はデッキの上から見る。緑の山に囲まれた港町。懐かしい思い出を、全部胸にたたみこんで、目は、むさぼるようにじつと見つめる。今、私から消え去ろうとしている陸地、山川、海岸、町。そのおもかげを永久に消さじと思ふ。そして見渡す。

昭和二十一年三月二十三日、私達台湾に住んでいた

日本人は、敗戦のため、一人千円を持って、千円を食のあわれな姿で、故郷基隆を後にした。故国の最後の青い線が雲のように、水平線上に消えて行き、船はスピードを増して進む。もう見えるのは海ばかりなので、しかたなく、船底に降りた。

敗戦の引揚者は、荷物が動物なみに、ぎゅうぎゅう詰めこまれ、かろうじて身を動かすことができる狭さだ。私は、つわりのため、食物もノドに通らないので、毎日、台湾から持ってきたパインの缶詰をあけて食べた。八十歳の主人の祖母と七十歳になろうとしている主人の父は、便所に行けないので、あきかんで用を足し、それを、主人と主人の弟が捨てに行く。

四月一日、和歌山県の田辺に上陸。父は、母と妹（五月十五日の空襲で爆死）の遺骨を首にかけ、よたよた歩く。祖母は、主人に、おんぶされ、身重の私は、リュックサックと少ない荷物を持ち、あとの荷物は、義弟が全部持つ。でも他を見れば、赤ん坊二人を、おんぶにだっこの姿もあり、あわれだった。上陸すると、まず、DDTの白い粉を頭から全身に振りかけられ、

久しぶりの入浴。

「帰国のお祝いにあずきごはんよ。」

というのを耳にして嬉しかった。いざたべようとして見ると、ちよっとおかしい。赤飯ではあるけれど、これはコウリヤン飯だそう。それでもおいしかった。

そこで一泊。明くる日は、汽車で京都に行った。西本願寺と東本願寺に行って昼ごはんの後、そこで行き先の違うものは東西に別れて、再び車中の人となった。汽車は満員で、坐ったまま身動きもできず、もちろん、便所にも行かれない。祖母と父は、またあきかんで用足し。

原爆の落ちたという広島を通る時は暗闇で見えなかった。八幡を通る時は見た。戦争の痛ましい残がい。そしてその夕方、やっと諫早についた。トラックに乗せて貰って、目的地の愛野村に行った。私はおなかの子が流産しないかしらと心配だったが、無事辿りつくことができた。

本籍地で聞いた第一声は、

「二、三日の滞在ならいいけれど、それ以上は困る。」

だった。それで、二、三日とめて貰って、主人の従兄弟の住んでいる二日市へ行った。

二日市の親戚は歯医者さんで、家族は、ご主人と奥さん、中学校三年の男の子を頭に、中学一年の次男。小学五年と四年の長女、次女。小学二年の三男に小学一年の三女。四歳の四女と、よちよち歩きの四男。合計十人。その中に、私たち居候四人半を入れてくれました。今、思うと有難いことなのに、その頃の私には、ちっともわからなくて、すまなく思っています。祖母、父、主人は小さくなって遠慮しているのが、私にははがゆかったのです。

台湾に居た時は、

「どうして、日本は敗けたのだろう」

実感がなかったのです。町では藍色の綿入れを着て、番傘を背負って豚肉を下げて下を向いている中国兵。銃剣こそ持っていないけど、姿勢を正して活発に行進している日本兵。三度の食事にも困らない。砂糖も塩も醤油も油も、キャラメル、あめ玉、化粧品、衣食住なんの不自由もなかった。電灯も、いつでもつくし。

ガス、水道もあった。履き物、着る物にも不自由なかった。

それが、日本では、何も無い。これじゃ、負けるのが当然だと、思った。

それでも、日本に、ずっと住んでいた人はいい。近所の人とは顔見知りだし、お金も一人千円以上は持っている。土地もある。家もある。

私達引揚者は、一人千円だけもってこられた。でも、顔見知りの人もいない。家もない。土地もない。信用はゼロ、何度、台湾に帰りたいと思ったことか。

古希を迎えた私が、過去をふりかえった時、あの頃は若かったので、耐えてくる事ができたけれど。その頃、引き揚げてきた老人達のことを思うと、身につまされる。

昭和二十一年の八月には、主人の祖母は、ふるさとの熊本で死んだ。昭和二十二年三月十三日には私の父が、そして四月十七日には主人の父が、極貧の中で、病気で、この世を去った。

この人達は、若い頃、勇んで植民地に行った先駆者

なのだ。裸一貫から出発し、いろいろ苦勞して得た収穫物を、一挙にむしり取られ、精神的、肉体的苦勞が、死を早めたのだ。

台湾引揚者

長野県 小林 きく美

私は昭和十一年八月、紹介され、単身渡台して、台南州知事官邸で、藤田知事の家庭の仕事に従事しておりました。十二年四月頃、台北州知事に栄転と共に、私も台北州知事官邸につとめ、もっぱら総督府の関係、官邸に、又軍司令官官邸への連絡など、外来客への応対にあたった。

すでに支那事変が起こり、兵隊さんたちの官邸宿泊も二回ほどありました。その間、知事も痔の手術や盲腸手術もされたので、奥様が渡台、十三年秋頃、それと入れかわりに私は東京の藤田家のお子さんのお世話に目黒区の家に戻りました。(十一月頃)翌十四年三月、

知事は退官となりましたが、就任予定の会社が未完成のため、九月頃まで東京ですごされました。

その間、私は六月五日、郷里の父の死にあい、かけた時には、父は目を落としていました。不幸を詫びるのみでした。涙隠して、同年九月頃、又藤田さんが会社役員就任と共に、再渡台して東門町四条通に住。

第二次世界大戦が始まり、藤田さんは防衛団長、会社役員、社長として活躍されました。私は部落の人びとと防空頭巾、モンペ姿、空襲が激しくなつて、煙幕がわりにガジュマルの枝葉を燃やしながら空襲警報に、急ぎ防空壕に逃げこんだこともあります。終戦まで、その間、爆撃を逃れるため、立派な住宅街を強制的に軍部でこわしたので、小さい家に移住しました。

さて終戦となつての人心の動揺、内地とは生死も首信も不明。台湾には中国本土の役員、軍人がきて、安藤軍司令官逮捕。自殺した人のことも耳に入りました。藤田さんも多少目をつけられるかと心配しました。会社の工具等は押しかけるし、そのうえ、中国からの役